

講 演

グレート・ダイアローグの源流 池田・トインビー対談

松 島 淑

最初に申し上げたいことは、この池田・トインビー対談は、トインビー博士の方から積極的に何回もアプローチがあって、実現をみた対談であるということです。

1969年9月に、博士から先生に手紙（9月13日付）が参りました。2年前の1967年来日した折、多くの方々から創価学会、池田会長について聞かれたようです。それで興味を抱き、英訳された著作や講演集を読んでみた。それで、ぜひ、会って、人類が直面する色々な諸課題について話し合いたいと希望する。自分が日本に行けばいいのだけれど、少し前に心臓発作を起こして長旅は出来ない。時期的にはいつでも結構ですが、あえて選ばれるとするならば、5月のメイフラワータイムが最もよいでしょう。こういう内容の手紙が来たわけです。

この1970年前後というのは、創価学会にとって激動の時代でしたから、池田先生もなかなか時間が取れずに、招請に応ずることは延びのびになっていたわけです。その間にも、何回かトインビー博士からのアプローチがあり、それで、最初の手紙から3年後の1972年5月に、お二人の対談が実現した、という経緯になっているわけです。

そして1972年、翌73年と年を越えて、延べ10日間、40時間以上にわたるといって、まさしくグレート・ダイアローグ（偉大な対話）となったわけです。それ以前にも、池田先生には「EECの父」と言われたクーデンホーフ・カレルギー伯との対談（1970年。「サンケイ新聞」に『文明・西と東』として連載。聖教文庫）等もありましたけれども、物理的に言っても、また、内容の幅広さから言っても、このトインビー博士との対談が、“グレート・ダイアローグ”の第1回目になった、と言って間違いないと思います。

トインビー博士のネームバリューと比較すれば、池田先生の名前は、まだまだ世界に知られていなかったわけではありません。そういう立場であるにも関わらず、なぜ博士は積極的に何回も何回もアプローチしてこられたのか。このことが一番大きな注目点ではないか、と思われまます。

このことは、色々な方々から伺ってみますと、大体、同じ結論になります。やはりトインビー博士の歴史観の根底に宗教があることは、ご存知の通りです。しかし、単なる宗教ではなく、その宗教というものが一人ひとりの内でインカーネーション（肉化）されて、民衆のパワーになった時、それが本当の歴史を動かす力になってくる、その点に対する着目があったと思います。それで、文字通り民衆宗教としての創価学会のパワーというものを、色々な角度から検討してみて、そのリーダーである池田会長（当時）に会わなければならない、とそういう結論になった、と申し上げていいと思います。

先に来日された折には、最初の手紙にもありましたように、トインビー博士は日本で色々聞かれたようです。当時の世情ですから、創価学会についても、池田先生に関しても、良いこと、悪いこと、特に、悪い話が多かったでしょう。博士は、そういったもの熟知されていました。ですから、最初にお会いした時、博士は「創価学会の池田会長について、多くの批判があることも、私は全部承知しております。しかし、そのような非難中傷というものは、民衆宗教というものの本質には関係ないんです」と言われ、そこから対談を始められたそうです。本当に見る人は見ている。海外の識者から、池田先生にアプローチがある場合は、ほとんど例外なくその角度です。

メニューインという今世紀最大のバイオリニストがおられます。彼が、かつて先生との会見を希望され、「聖教新聞」本社でお会いされました。その時も、何で会いに来られたか、と言いますと、彼はロンドンに自宅がありますけれども、「自分の周辺に住むSGIイギリスのメンバーの姿を見てると、どうしても関心を持たざるを得ない」と言うのです。要するに、彼らが生き生きとしているし、池田会長のことを本当に親愛の情を持って見ている。しかし、親愛の情ではあるけれども、雲の上の人を崇めているような感じではない。どうして、あのような感情が生まれてくるのか、それが知りたくて、あなたに会いに来た、という風に言っておられました。

立ち上がった民衆パワーに注目

あるいは世界的な作家であり、フランスの文化大臣だったアンドレ・マルローなども、ドゴール大統領の特派大使として来日された時、「日本で一番お会いしたいと思っていたのが、池田会長でした」と、彼からアプローチされてきました。

その出会いについては、京都大学の名誉教授で、トインビー博士の『図説 歴史の研究』（学習研究社刊）の翻訳などにも携わっておられる桑原武夫さんが、非常に面白い一文を寄せて下さっておりますので、それをご紹介してみたいと思います。非常に本質をえぐったものです。

『（マルローが）今回、いちばんお会いしたいと思っていたのが、池田会長でした』と言うのは、単なるエチケットでは決してない。この大知識人が『ぜひ教えていただきたいことがあります』と言うのは、『法華経』の教理と平和精神との思想的関係といったことではなく、関心のあるのは一千万の会員を擁する『力ある組織』としての創価学会を率いて号令し、また国会の第三勢力たる公明党を創設した大実践者池田大作その人、彼の持つ力の淵源、ならびに今後その力の発揮されるべき方向なのである』『池田大作全集』第4巻、聖教新聞社刊』と言っています。さらに、桑原さんは、「政治権力によって教団が骨抜きにされてしまった日本とは異なり、宗教が政治権力と拮抗しうる力をもった西洋の知識人は、創価学会にたいして、日本の知識人とは比較にならぬほど強い興味をもっている。トインビーもその一人である」と、言っているのです。ここが一番のポイントだと思います。

ヨーロッパはご存知の通り、宗教パワーと政治パワー、教権と国権の間のせめぎあいの歴史の連続です。11世紀のかの「カノッサの屈辱」で、ハインリヒ4世がグレゴリウス7世に屈服して以来、数百年の間は教会のパワーが上だったわけです。それが近世・近代になって政教分離の路線になってきた歴史があるわけで、従って、宗教パワーに対しては悪い意味でも、良い意味でも非常に敏感です。従って、創価学会がこれだけの力を持ってきた、当時の公明党があれだけ躍進した、ということに注目していたのだと思います。

その点は、桑原さんが言っておられますように、海外の知識人と日本の知識人とは、画然た

る差があります。何故か、と言うと日本の歴史を見れば分かりますように、宗教が政治権力を脅かす勢力になったことは本当にわずかです。宗教パワーは、“一向一揆”とか“天草の乱”とか、まるで間欠泉のように噴出するということがあったぐらいです。後は全部、何らかの形で政治権力から距離を置くか、屈服するか、という歴史です。

福沢諭吉は「封建制度は親のかたき」と言うぐらいの人でしたから、そういうことに対しては非常に厳しく糾弾しています。『文明論之概略』という本がありますが、その中にこういう一説があります。

「仏教盛なりと雖ども、其教は悉皆政権の中に摂取せられて、十方世界を遍く照らすものは、仏法の光明に非ずして、政権の威光なるが如し」（岩波文庫。第9章「日本文明の由来」）

確かに、仏教は盛んです。仏閣、いらかを並べ、坊さん一杯いる。しかし、人格のバックボーンをなす肝心要の教えというものは、ことごとく皆、政権の中に摂取せられてしまっている。十方世界をあまねく照らすのは、仏法の教えのように見えても、それは政権という「虎の衣を借る」狐のようなものである、と言うのです。その次には、福沢諭吉流の太刀捌きではありますけれども、「日本国中既に宗教なしというも可なり」（同）とまで、彼は言い切っています。人格を形づくる宗教の名に値する宗教など日本にはないのだ、と言っているのです。そうした情けない経緯がありますから、結局、日本人は宗教パワーに対しては浅薄な見方をします。そこから宗教蔑視というか、軽視という流れが出来てしまっているわけです。

日蓮大聖人は「わづかの小島のぬしら（主等）がをどさん（威嚇）を・をちては閻魔王がせめをいかんがすべき」（『日蓮大聖人御書全集』。「種種御振舞御書」911頁）と仰っている。時の権力者を「わづかの小島のぬし」と言い切っている。それが大聖人の“権力者観”でしたが、残念ながら、七百年の間に、それが民衆パワーまでなることはありませんでした。その精神を民衆パワーにまでに広げたのが、特に、戦後における創価学会の民衆運動です。従って、マルローのように海外の識者は、そうした見る眼を持って来るわけですが、日本では創価学会を見る場合、全部、斜視眼、近視眼でしか見られない。そういった通弊があります。

今、東京の戸田記念講堂で「偉大な指導者 周恩来」展が行なわれています。中国の周恩来首相が、何で池田先生にあれほど注目されたのか。日本ではなかなか理解されることがありません。当時、周首相は癌の末期で、「会見をしたら、命の保証は出来ない」と、医師団から言われた。しかし、首相はあえて、訪中していた池田会長に会うと言われた。そこで医師団は鄧穎超さんに伝えた。夫人が「いいです」と言ったら、会見に出ることを許可しようとしたわけです。すると、夫人は「周恩来同志が、そう言うのでしたら、合わせて上げて下さい」と言われ、そこで会見が実現（1972年12月5日）したわけです。

このエピソード等が展覧会には出ておりますけれど、何故、周首相がそこまで会長に注目されていたのか。それは、創価学会が、民衆の中から立ち上がった組織だからです。その一点で、創価学会は括目すべき存在である、と見ていたのです。しかも、会見の四年前には、すでに会長が、日中国交正常化を提言（1968年9月8日）をしたということで、注目されていた。いわゆる民衆パワーというものに対する注目度が全然違うのです。

ですから、最初に返りますけれど、あのトインビー博士から池田先生に対して、何回も何回も「ぜひ、対談をしたい」と要請があり、実現したのが池田・トインビー対談であるという背景をご承知おきいただきたいと思います。

“源流”として世界24カ国で翻訳

次に、この対談について、タイトルで「グレート・ダイアログの源流」と謳わせていただいた理由について述べたいと思います。

池田先生は、ご存知の通り、その後も、世界的な学者、指導者など多くの識者と対話を続けられています。その中で何故、トインビー博士との対談が“源流”と言えるのか。それは物理的に言っても、文字通り、最初のグレート・ダイアログであった、ということが第一点目上げられます。「10日間、40時間以上」という記録は、池田先生の対談でもおそらく空前絶後だと思います。毎日、毎日、午前10時に始められて、昼食をはさんで続けられた。今日の対談というものは、先生と相手の方が大綱的なものを色々話し合わせ、その後は、往復書簡になるというのが大体のパターンです。40時間という長時間、直接、話し合っ、内容を詰められたのは他にはありません。“絶後”と言ったら失礼かも知れませんが、今後も、恐らくないと思います。そういう意味では、記念碑的な対談であると言えると思います。

それから、この対談を“源流”と言う第二の理由は、すでに24カ国語に翻訳され、世界において広範に読まれていることが挙げられます。このことも大きな特徴であると思います。このトインビー対談に関しては、本当に色々な方が言われます。ある会合で、秋谷栄之助会長が話していたことですが、南アフリカの指導者、ネルソン・マンデラさんも読んでいたし、あるいは、イスラム穏健派の指導者で、インドネシアの前大統領のワヒドさんも「20年の間に、この池田・トインビー対談を10回読んだ」と言っていた。それほど、この対談は世界の識者に対して膾炙しているのだ、と言っておられました。

私自身も、色々、先生のお手伝いをさせていただいている経験から言っても、そういうことは何回もあります。ゴルバチョフ対談の切っ掛けもこれでした。ロシアにアレクサンドル・ツィプコという大変、優れた哲学者がいます。彼は、ゴルバチョフ財団の事務局長になる前には、モスクワの「政治経済研究所」の所長をやっていた人です。以前から、ロシアにあって本当に開明的な哲学者だな、とっていました。

その頃、ロシアでは、あのペレストロイカが始まっていました。モスクワに行って、彼と会って論を戦わせたことがありました。こちらが創価学会について話をしたら、ツィプコさんはトインビー対談の話題を持ち出しまして、それで盛り上がった経過があったのです。残念ながら、池田・トインビー対談集については、すでに24カ国で翻訳が出ているのに、ロシア語版はまだ出版されていない。しかし、彼は、英語がペラペラですから英語本で読んでいたのです。

その後、彼が、ゴルバチョフ財団の事務局長となり、名誉会長とゴルバチョフ前大統領との対談の窓口として出て来た時にはびっくりいたしました。そして、名誉会長もゴルバチョフさんも、お二人ともグレートでお忙しい方ですから、我々が具体的な打ち合わせを進めるという流れになりました。その時、彼が、「じゃあ、トインビー対談に匹敵するように、トップたちに努力してもらいましょう」と語ったほど、この対談集は世界で読まれているということです。

世界に波動、さらに新たな対話を生む

今、キューバで、大変、話題になっている本に、名誉会長とホセ・マルティ研究所所長との対談集『カリブの太陽 正義の詩』(潮出版社刊、2001年)があります。キューバの使徒、ホセ・マルティを巡る対談です。

また、「知られざる歴史 創価学会」というビデオを、ご覧になったことがあるかも知れません。この映画が、キューバの首都ハバナの国際映画祭で上映された、というニュースが去年

の暮れに出ました。それが終わった時、全員がスタンディング・オベーション、すなわち皆、立ち上がって拍手した、とされています。そのことが、カストロさんの耳に入り、議長のお声掛けで、あの映画は改めて国営テレビで放映されることになったのです。

この間、日本駐在のキューバ大使に会った人に聞きますと、そのビデオを国営テレビが放映した背景には、実は、あのホセ・マルティを巡る対談集があった、と言うのです。「あの対談で、今、キューバは揺れています」とも、大使が言っていたそうです。映画祭の劇場で鑑賞する人は、せいぜい四百人とか五百人でしょう。しかし、それが評判になり、バックになって広がり、今では大学や高校のテキストにもなって、まさに“キューバが揺れている”というのです。

この対談の切っ掛けとなったのは、何だったか。対話の相手となったシンティオ・ヴィティエール博士との出会いです。この方はパチカン放送などに、年中出ている大変、著名な学者ですけれども、やはりトインビー対談のスペイン語版を読んで、それに対する覚書を寄せてこられたのです。池田博士とトインビー博士は、こういう点で意見が一致しているけれども、ホセ・マルティの思想も、二人の考えと波長が合っている、ということをして30項目ほどの覚書を送ってこられた。そのことが切っ掛けとなり、対談が実現し、あの『カリブの太陽 正義の詩』という対談集となったのです。トインビー対談を“源流”として開けてきているのです。

トインビー博士と実際に会った時も、池田先生に色々な方を紹介してくれたそうです。それでお会いした中で、一番大きな実りをもたらしたのはルネ・ユイグ対談（『闇は暁を求めて』講談社刊。聖教文庫）です。マルローもそうです。それから対談集にはなりませんでしたが、何回か対話をされたロックフェラー大学研究所教授で、環境問題の碩学、ルネ・デュボス博士も、トインビー博士から紹介されたお一人です。あるいは、残念ながら相手が亡くなってしまったために、対談は実現しなかった方ですけれども、レイモン・アロンというサルトルに匹敵するようなフランスの知識人とも、対話するスケジュールが入っていたようです。そのように、色々な角度から言いましても、トインビー博士との出会い、対談が、先生のグレート・ダイアローグの“源流”になっていることが言えると思います。

対話は“溝”に架ける“橋”の役割

それ以外に、もう一つ言えば、トインビー対談の内容・中身は、グレート・ダイアローグと言うに相応しく、全てが集約されているという意味でも、やはり“源流”であり、原型であると私は思います。

その第一番目は、内容が非常に広範で多岐にわたっている、ということが言えると思います。『二十一世紀への対話』の「序文」の冒頭でも、トインビー博士はきちんと仰っておられます。「読者諸兄は「目次」を一瞥すれば、本書が広範な話題を扱っていることをただちに知るはずである。そのように多くの話題がこの対談で論じられた理由は、それらがいずれも二人の対話者にとって個人的な関心事であったためである」と、さらっと述べられていますけれども、これは非常に大きな特徴です。

対談の内容を読んでみればお分かりのように、非常に広範な話題に言及されています。もちろん、宗教、歴史といった両者の共通の関心事はもとより、政治・経済、文化、社会、家庭、あるいは教育といったところにまで及んでいます。一見脈絡のないように見えるかも知れませんが、それはトインビー博士と池田先生の持つヒューマンイズムの証であると私は思います。

今年（2002年）の1月26日の「SGIの日」の記念提言（「人間主義——地球文明の夜明け」）

の中で、池田先生は、古くはローマ時代から言われたヒューマニズムの一つの格言を引いておられました。「私は人間だ。人間のことは何でも他人事（よそごと）とは考えないのだ」と。人間であるから以上、人間に関すること、つまりヒューマン・アフェアーズ、人間に関することは全部、他人事ではないのだと言うのです。政治であれ、経済であれ、宗教であれ、現代では全部が細分化され、専門化されて分かれています。しかし、全て人間に関することである限り、全部、自分の関心事なのだ、という視点で、対談では幅広い話題が取り上げられているということです。仏法から言っても「無量義は一法より生ず」という原理があります。生命、森羅万象は一法から生じているわけですから、全部が自分の関心事になって当然なのです。

ハワイに「東西センター」、イースト・アンド・ウェストセンターというのがあります。その理事長にオクセンバーグという方がいらっしゃいますけれども、彼が「池田会長というのは、橋を架ける人だ」と言っていました。これは巧い表現です。色々な意味での“橋”を架けるという意味です。東洋と西洋の間に架ける“橋”でもあるでしょうし、人間と人間の間に架ける“橋”でもあるし、あるいは伝統と近代化を結ぶ“橋”でもあるし、知恵と知識の“橋”、あるいは宗教と社会の“橋”でもあるし、そうした意味でも、色々な角度から“橋を架ける人”だ、とこう表現をしているわけです。従って、人間である限り、全部に“橋”を架けていくわけですから、取り上げたテーマ自体が、非常に広範かつ多岐にわたっているということです。

先程、キューバの話が出ましたけれど、SGI会長とカストロ議長との会見では、対談だけでも1時間近くの話になり、その後のレセプションも盛り上がり、夜半になってしまいました。あまり遅くなったので、先生は失礼して帰って来たのですけれども、キューバ側の方々は、それから午前1時頃まで盛り上がり続けていた、と言うのです。向こうの人は、運動選手の体格が示すようにタフですから。それが、やっと終わって、別れしなに、閣僚に対してカストロさんが、SGI会長との会見を振り返って、「あれほど感動的な会談は、かつてなかった。心に焼き付く強烈な人だね。第一級の人物だ」と言われたそうです。問題は、その次の言葉です。「池田会長の作った“橋”を、絶対に壊してはいけないよ」。これが、議長が一番最後の言葉、いわゆる閣僚たちに対する言葉だったそうです。カストロ議長も、「池田会長の作った“橋”」と表現し、ヒューマニズムの思想と行動を、越え難い溝や距離に架ける“橋”に譬えているのです。

多様で異なる心を繋ぐ“結合の力”

トインビー対談に見られるように、広範、多岐にわたる人間に関わる問題に“橋”を架けていく。その姿勢は、先生のその後の対談にも反映されていくこととなります。となると、“橋”を架けるには、何が必要なのか。いわゆる“結合の力”です。結び付ける力です。これが本当に脈動しているのが、トインビー対談であると思っています。

トインビー博士との対談が始まった頃だと記憶しています。創価学会女子部の総会（1973年3月11日）で、先生は、女性の目指すべき指標として、「善美」という話をされたことがあります。その中で「善悪は人間独特の規範」であるとして、その悪の本質を“割り（デバイド）”である、と指摘されました。すなわち、悪の本質は“割り”にあり、全てを割っていく。人間の心を割る。師匠と弟子の間を割る。親と子の間を割る。夫婦の間を割る。友人関係を割っていく。従って、善というのは、逆に、結び付ける力になります。「結合の力が善なのだ」というのは先生の哲学ですけれども、ある長編詩の中では「結合は善と知る／分断は悪と知れ／和合は喜びの花／亀裂は悲哀の因」という謳われ方をしたこともあります。ですから、全てを割っていく悪の力に対して、全部、善として結合させていく力を持つ。先生の数々の対談集は、こう

した点が大きな特徴ではないかと思えます。

先生から伺った話ですけれど、対談の後になって、トインビー博士が通訳に仰ったそうです。「こんなに共通点があるのだったら、対話というよりもお互いの一致点に向かう論議になった」と、こういう言い方をされたそうです。それほど、ことごとく双方で意見が一致してしまっただけで、対立というか、最後まで意見が一致しなかったのは、「安楽死」のことについてです。「安楽死」をどう見るかという点で、先生は、耳の障害にも負けず、頑張ったベートーベンのような例もあり、とにかく生きて生き抜くことが本当の尊厳であるとして、仏法者の立場から「それは認められない」と主張しています。しかし、トインビー博士には、自分の友人が重い病気に掛り、創造的な活動が出来なくなってしまったために、自分から尊厳死を選んだ方がお二人いらしたようで、博士も同情的でした。ですから、この点では、最後まで一致していません。ただ、その一点だけが不一致で、後は、全部一致した、と言われていました。

博士自身が記された「序文」にもありますが、「しかしながら、両著者におけるそうして宗教的、文化的背景の違いを考えると、むしろ二人の間で交わされた対話には、それぞれの人生観、目的観に、驚くほどの合致がみられるのである。しかも、そうした合意点はきわめて広範囲に及んでいる。そして相違点は比較的わずかである」と。

“比較的わずか” どころではない。相違点は、「安楽死」の一点です。しかも、後に、先生は、ジャーナリストの大森実さんと対談したことがありましたですけど、「トインビーさんの“安楽死”の肯定というのは、肯定よりもむしろ許容と受け止めました」と、印象を述べておられます。「許容」とは「受け入れる」という意味で、「肯定」と「許容」とでは全然ニュアンスが違うでしょう。「肯定」とは積極的なもので、「許容」というのは止むを得ない、という感じですからね。しかも、トインビー博士の方も、一致はしない部分でも、「池田会長の言うことは、よく分かる」と頭からの否定ではなく“許容”されている。

先生が一度、言われたことがあります。「トインビー博士というのは、信心はしてないけど、もう山の八合目まで登っている方である」と。それに対し、「君らは、信心していても二合目、三合目の人もいる。仏法読みの仏法知らずだ」などと叱られたこともあります。それほど、トインビー博士との波長が一致していたということです。それほど素晴らしい対談であったのだと思います。

先生の“結合の力”には凄いものがあります。ある時、先生は、色々な識者との対話をしてきたことを振り返られながら、「残されたテーマは何があるか」と、聞かれたことがあります。当時は、まだテヘラニアン対談（『二十一世紀への選択』。潮出版社刊）が出版されていない時でしたから、「イスラムについては、まだです」と申し上げました。すると、いきなり先生から返ってきたのは、「ホメイニ師と対談をやろうか」という言葉でした。「ホメイニ革命」で、特に、西側から敵視されていたような人物です。そういう人間とも対談やろうか、というわけです。半ばジョークのように聞こえても、先生の場合は本気です。機さえ熟すれば、対話を実現させていたかも知れません。人間である限り、全て自分の関心事である、という箴言そのものです。それほど先生の“結合の力”というものは、キャパシティー（許容量）を持っているということです。

それに関して言えば、最近、『新しき人類を 新しき世界を』（潮出版社刊、2002年）という対談集が出版されていますが、その中で、モスクワ大学の総長で、対談者であるサドーヴニチさんが適切な表現をされています。「私の記憶が間違っていなければ、池田博士は、すでに四半世紀以上に東洋と西洋の対話を始められました。その始まりが、20世紀の偉大な歴史学者

トインビー博士との対談だったことは、あまりにも有名です。

その後の数多くの対談をとおして、池田博士は、文学史上忘れられかけていた『対談』というジャンルを現代に生き生きと蘇らせました。

私が心打たれるのは、あなたの対話が常に、まったく違う考えをも理解し包容されようとする、いわば他者への理解の眼に貫かれていることです。よく学者が好むディベートとは際立って違っています。ディベートでは、双方が、自らの論拠の正しさを証明し、自分の経験を絶対化し、相手の間違いを指摘することになっています。

しかし、あなたの対談には、そのような影は少しもありません。多様な異なる人々の心をつなごうとされているかのようです」と。

これこそが“結合の力”です。“多様で異なる人々の心”を繋ごうとされている。そもそも言葉や論議というのは、使う人の心によって二つの作用があるでしょう。普通、私たちがディベートと言うと、大体、論議どころか、下手をすと言ひ争いになりかねません。先生の場合は全く逆です。相手をずっと包み込んで“橋”を架ける。サドーヴニチィさんのような素晴らしい学者になると、そのことを適確に“結合の力”と捉えられたのだと思います。そうしたことが“源流”の“源流”たる所以だろうと考えています。

水面下の“ゆるやかな動き”が歴史を造る

内容的に申し上げますと、やはり一番注目される点は、長期的展望に立った史観という点で、両者の波長が合っていることだと思います。トインビー博士の遠大な史観は有名ですけれども、これが先生とピシッと合った。

トインビー博士から招請の手紙が来たのは、先程申し上げたように、1969年のことですが、その一年後に、先生は「言論問題」という激動の渦中で『青年の譜』という長編詩を書かれています。その中にこういう一節があります。「二十一世紀に生きゆく／民衆の願望は／外形のみの改革にはない／一人ひとりの哲学と思想の中に／平和裡に漸進的な／汝自身の／健全なる革命を願っている／これには長期の判断と／深い哲理を必要とする／これを総体革命と命名したい／そしてこれを／われらは広宣流布と呼ぶ 笑う者には／汝の笑うに任せよう／誹る者には／汝の誹るに任せよう われらには／洋々たる前途に／幾百万年の証明の歴史が待っている」（聖教文庫）。これは史観ですね。

「長期の判断」と「深い哲理」、この二つに注目していただきたい。先生の仏教を根底にした仏教史観には、この二つの観点があるわけです。もう十数年前になりますけれど、「フランス革命200周年記念行事委員会」のパロワン会長が来られて池田先生と会われたことがあります。ご存知の通り、フランス革命は1789年のことですから、その二百周年は1989年に当たります。それに対して色々準備をされていた。この記念行事というものについて、パロワンさんは「30世紀への出発点にしたい」と、先生に言われました。そうしたら、すかさず先生は「仏教では“末法万年”と言います。従って、“万年”の尺度から言うと、30世紀という意義付けは、大変、素晴らしい」と返された。まだ、21世紀だってどうなるか分からない時ですから、30世紀などと言っても、とても分かりませんよ。しかし、先生にはそういう懐の深さと言いますか、そういうロングスパンで物を観ていくという、非常に卓越したパースペリティブを持っておられます。空間的にも、よく「地球は狭過ぎるよ」と仰いますけれど、そういう言葉が似合う人というのは余り少ないですよ。こうした空間的にも、時間的にも壮大なパースペリティブがトインビー博士とは非常に合うわけなんです。

博士と対談をされていた同じ時期に、西ドイツの首相がロンドンに滞在中で、当時イギリスのヒース首相らと会っています。その様子がテレビでも大きく報道されていた。しかし、『私たちの対話は、地味であるかもしれませんが。しかし、後世の人類のための対話です。未来のために、大いに語りましょう！』と、トインビー博士が言っていたのが忘れられない」と、先生は仰っておられました。

これは対談の中ではないのですが、先生は、色々な著作の中や、あるいはスピーチの中で、トインビー博士の「時間の遠近法」ということに非常に注目されています。これは「シビリゼーション・オン・トライアル」（邦訳『試練に立つ文明』。社会思想社刊）という著作の中に、博士が1947年に書いた「文明と文明のあいだの遭遇戦」という論文の中にあるのです。この一節に、先生は何回か言及されています。

博士は、こう書かれています。「新聞の見出しとして好個の材料となるような事柄は、人生の流れの表面を浮遊しているゆえに、またそれらの事柄は水の底で活動し河底までもしみ通る、ゆるやかな、眼に見えない、秤にかけることのできない動きから、我々の注意をそらせるがゆえに、われわれ注意をひくのであります。しかし究極において歴史をつくるものは実はこの水底のゆるやかな水の動きであり、われわれが過去を振り返って、その日その日ののはなやかな出来事が遠近法においてその在るべき真の大きさにまで縮まったとき、はじめて大きくその姿をあらわしてくるものはこの水底の動きであります」と。

社会の表面で華やかな現象は、新聞の見出しにもなって人々の目を引くかも知れない。しかし、それは消えていってしまうもので、いわば泡のようなものである。本当に歴史を造っているのは、博士が言うように、「河底までもしみ通る、ゆるやかな、眼に見えない、秤にかけることのできない動き」なのである、ということなのです。このことが大事なんです。そうすると、必然的に長いスパンで物事を観ていかなければならなくなるのは当然のことでしょう。

先生は、吉川英治の『宮本武蔵』の最後の文章が非常に好きで、何回も引かれています。巖流島で武蔵が佐々木小次郎を破って帰ってくる描写のところですよ。

「波騒は世の常である。波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は歌い雑魚は躍る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水の深さを」。

「波騒は世の常」です。「波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は歌い雑魚は躍る」、泳ぎ上手なのは毀誉褒貶に流されゆく「雑魚」なんです。「誰か知ろう、百尺下の水の心を。水の深さを」、この次元に深く棹さしているのが我々の運動なんです。

例えば、「生命の尊厳」の問題にしても、牛についてインドとスペインでは受け止め方が違うだろうな、という話になったことがあります。インドは聖牛です。スペインで闘牛士と言ったら英雄ですから、これはずいぶん違うな、と先生も苦笑されていました。そうした現実と、「生命尊厳」という課題とどう取り組むのか。先生は、インドが良い、スペインが悪いというのではなく、「生命の尊厳」への傾向性の流れを作るのだ、と言われました。そのことを具体的に反映したのが、SGI「1. 26提言」（2002年。前出）での「殺す心を殺す」ということです。そういう流れを作ることが大事だと言うのです。当然、一人ひとりの心の変革の課題である以上、新聞に出るわけでもない。まさに「ゆるやかな、眼に見えない、秤にかけることのできない動き」である。しかし、これを持続、拡大して行くならば、着実にそうした傾向性の流れが出来てくることは間違いない。いずれにしても、そういった「水底のゆるやかな動き」こそが注目に値するものなのです。

4年前（1998年）のSGI「1. 26提言」（「万年の遠征——カオスからコスモスへ」）の中

では、「撰時抄」の「萬年の外・未来までもながる（流布）べし」（御書329頁）という御文を引かれています。トインビー博士も、前掲の論文で「時間の遠近法」を提示したのが1947年です。それを起点として、それから百年後は2047年。そこから、さらに千年後の3047年、二千年後の4047年、三千年後の5047年における歴史家の眼差しというのを想定されているのです。

現代のグローバリズムの流れがあります。より大きく見れば西洋流の近代化というの流れもあります。それが2047年の歴史家の眼から見たらどう見えるのか。3047年ではどうか。4047年、5047年ではどうか。そういう視点から、トインビー博士は書いています。「思うに、5047年の歴史家たちは語るでありましょう。人類のこの社会的統合ということの重大な意味は決して技術や経済の世界に見いだせるものではない。戦争や政治の世界に存するのでもない。それは宗教の世界に存するというでありましょう」と。

歴史家としてのトインビー博士は、そうした雄大な史観を持って、実際の歴史との実証性とを付き合わせるという作業をされたのです。だからこそ、「水底のゆるやかな動き」に注目しなければならないわけです。水の底のことは分からないわけですよ。大体、今世紀の初めにボールペンが発明されることを当てた人すらいないといわれているほどです。表面上に浮遊している木の葉の行く末を予測することすら不可能なのですから、目には見えない「水底のゆるやかな動き」に眼をこらすことが、非常に大事な点であると思います。

長い眼で物事を観ることの大切さ

今、「心性史」という歴史のジャンルがあります。

フランスの大歴史学者であるミシェレが書いた『人類の聖書』という本の邦訳が出て、聖教新聞の書評欄にも大きく紹介されました。その翻訳者は、高校時代に読書サークルをやっていた時の仲間だったので送ってくれました。その彼は書いています。『人類の聖書』とはキリスト教のバイブルという意味ではなくて、各民族が「集団が無意識的作用をして、つまり民衆次元で、自らの願望やら悲嘆やらを投影して生み出した神話・宗教」をてがかりにしたもので、「今日という心性史のはるかな先駆けだったのかもしれない」と。すなわち心の性格の歴史ですね。

恐らく、トインビー博士の見方なども、全てロングスパンで観ていきますから、「心性」まで踏み込んだ見方をしていると思います。従って、例えば、共産主義に対する裁断というか、判断の仕方なども非常に適確です。先の論文「文明と文明とのあいだの遭遇戦」が書かれた1947年と言えば、東西冷戦が始まった頃です。その時でも、共産主義と資本主義の対立なんてものは「案外とるに足らない小事件と見えてこないとは限りません」と言っているのです。今の眼から見れば、社会主義の壮大なる実験という虚構の執着は、余りにも多くの犠牲を生み出したから、「小事件」と喝破する眼さえ持てばその犠牲は回避できた訳です。

こうした見方は、池田・トインビー対談の中でも非常に適切です。「資本主義と共産主義の対立といってもそれは私の見るところでは、それはほとんど見せかけに過ぎず、それはずっと古くから繰り返されてきた類の競い合う地方国家間の国益と野心をめぐる構想を覆い隠す一種の仮面なのです」。文字通り、そのようになりました。1990年に起こった雪崩現象のようなソビエト、東ヨーロッパの崩壊を見れば、それまでの体制論議は“一種の野心の仮面”であって、イデオロギーなどというものは、民族から見れば泡みたくないものだ、と言ったドゴールの発言の方がよほど正しかったわけです。そのドゴールとは異なる角度からですが、トインビー博士はそのことをズバッと言いつけています。

そのように、長い眼で見ることの重要性というものが、この対談を通して色々なところで浮

かび上がって来ていると思っています。

根本の“法”こそ「究極の精神的實在」

それからもう一点、長編詩「青年の譜」から“総体革命”には「長期の判断」と「深い哲理」の二つを必要とする、と申し上げました。「長期の判断」と共に、「深い哲理」を持つことも非常に大事なことです。

トインビー対談を読み解く上で、この「深い哲理」に照応する言葉であり、恐らく最大に重要なキーワードとなるのが「究極の精神的實在」という言葉です。対談集の中にも繰り返し、繰り返し出てきます。英語では「アルチメイト・スピリチュアル・リアリティ」と言います。これはトインビー史観を理解する上で、非常に重要な語になります。博士は「序文」の中でも強調しておられます。念のため、一応、読んでおきたいと思います。「まず、二人は宗教こそが人間生活の源泉であると信ずる点で同じ見解に立っている。また、人間は宇宙の万物を利用しようとする生来の傾向性を克服すべく不断の努力を払わねばならず、むしろ己れを自在に宇宙万物に捧げしめ、もって自我を“究極の實在”に合一させるべきである、とする点でも二人は同意見である。ここに“究極の實在”というのは、仏教徒にとっては“仏界”のことである。二人はまた、この“究極の實在”が人間の姿をした人格神ではない、と信ずる点でも立場を同じくしている」。

トインビー博士が言う「究極の實在」、あるいは「究極の精神的實在」と言われるものは、キリスト教で言う人格神ではなく、どちらかといえば、仏教的なものに近い。これを仏教で言う「宇宙生命に内在する法」と、先生は対談集で展開されておられます。この辺は非常に重要なので、もう少し論及してみたいと思います。先生が「究極の精神的實在」という点に関して、それは「宇宙と生命に内在する根本の“法”」であると言ったところ、トインビー博士は「仏教のもつ性質についてのただいまのお話、よく意味がわかります。そのことは、私のいう高等宗教がいかなる性質のものかという点に私を立ち戻らせます。

私が高等宗教というとき、その意味は、人間各自を“究極の精神的實在”に直接触れ合わせる宗教ということです。つまり、同じ“究極の實在”との触れ合いにしても、人間以外の自然の力とか、人間の集団力が具現化された制度とかの媒体を通じて、間接的に触れ合わせるものではないのです。このように定義づけられる高等宗教こそ、現代人が必要とする宗教です」(第3部、第2章「汎神教への回帰」)。

これがトインビー博士の宗教観の一番の根本のところですよ。

神本位の宗教と法本位の宗教では、どちらがより有効であり、価値があるかという問題が提起されていますが、一神教にあっては「究極の精神的實在」は“三位一体”の神、人格神として想定されます。すなわち神とは「究極の實在」が人格的な存在として現われるものとされているわけで、これは自分の宗教観にはなじまないとして、最後には、「このように考えると、私も、ゼウス、アテナ、アポロンといった万神殿の神々や、ヤーヴェのような唯一神よりも、仏教に説かれる普遍的な生命の法体系のほうが、“究極の精神的實在”を、より誤りなく示し出しているように思います」(同)と言っているのです。

トインビー博士には、欲望肥大化に支えられた近代文明は、キリスト教の“嫡子”である、という判断がありますから、キリスト教に対しては非常に批判的です。それに対して、仏教に対する思いというのも非常に強いのです。これは卓越した学識の人に共通していると思います。例えば、アインシュタインなども、トインビー博士と同じような瓜二つの宗教観を持っていま

す。彼は「宇宙的宗教感情」ということを言います。『アインシュタイン神を語る』という本では、「異教徒のデモクリトス、カソリックのアッシの聖フランシスコ、それからユダヤ教のスピノーザ、仏陀」と列挙され、彼ら宗教者に共通しているものは、“宇宙的宗教感情”というものを体現している点である、と。そういう宗教でなければ今後の21世紀の宗教たる資格はない、とっております。これはトインビー博士の指摘とトーンを一にしております。

従って、何らかの形で組織だとか、人格神だとか、制度とかいうものを通して人間の宗教性が開示されるのではなくて、人間の生命というものを直接“究極の精神的実在”に触れ合わせる、そのことを第一義とする宗教でなければ宗教の名に値しない。それから見ると、キリスト教よりも仏教の方がよほど高等宗教である、これがトインビー博士の判断です。こういった点が、アインシュタインなどとも共通していると思います。

名誉会長執筆の「随筆・新人間革命」の中で、上智大学の名誉教授だった安齋伸先生の話が出たことがあります。これは安齋先生から私も、直接、何回も伺ったことです。実は、安齋先生が池田先生と会った時に、創価学会が究極の目的として広めるものは何ですか、と聞かれたことがあったそうです。安齋先生は、恐らく「御本尊流布」であるとか、「曼荼羅」である、といった返事が返って来ると思われていたらしいんです。ところが、池田先生は「久遠元初の法です」と仰った。それを聞いて、カソリックでも重要な立場におられる安齋先生は感動され、最後には、芳名録に「共に久遠元初の法を求めて」と書かれて帰られたそうです。何でそれほど感動されたのか。要するに「究極の精神的実在」、それに密着した法、それがどれほど人間、人類にとって大事なものであるかが分かっていらしたからでしょう。先程、アインシュタインが言ったように、異教徒のデモクリトス、カソリックのアッシジの聖フランシスコ、それからユダヤ教のスピノーザ、仏陀、全部共通するものが“法”なんです。言葉を代えれば「宇宙的宗教感情」です。ここまで到達しないと、いわゆる世界の識者と呼ばれるような人とは波長が合わないんですね。その中でも、最も波長の合ったのが、池田先生とトインビー博士の対談だったわけです。

大我への超克こそ宗教の真髄

小説『人間革命』（既刊12巻。聖教文庫）をお読みの方は、「極東軍事裁判」について書いた「宣告」の章（第3巻）がありますね。この中でインドのパール判事を紹介されているのをご記憶になっている方もあるかと思えます。

いわゆる「極東裁判」の歪んだ性格を指摘した判事です。あのような形で勝者が敗者を裁く、「文明」が「野蛮」を裁くというのは一方的だ、とパール判事は指摘しました。もちろん、日本の戦争責任を認めないわけではないけれど、「戦争犯罪相対化」という観点から、次第に「日本無罪論」へと展開したことは有名ですね。そのパール判事は、池田先生と対談時のトインビー博士と同じくらいの年代の80歳の時、カルカッタ大学で学生たちに「トランセンデント・リアリティ」というのを生涯の目標とせよ、と言われたそうです。

「トランセンデント・リアリティ」、いわゆる「超絶の実在」ですね。それは、トインビー博士の「究極の精神的実在」と同じ次元を志向しているわけです。この「トランセンデント・リアリティ」を目標にしていかなければ、今後の変転絶え間のない国際社会の未来を開いていくことは出来ないというのが、若き学徒に対するパール判事の贈る言葉だったようです。

そのように、一つの具体的な形、ショートスパンな展望、指標だけではなくて、「河底までもしみ通る、ゆるやかな、眼に見えない、秤にかけることのできない動き」を重視するように、

目に見えないだけにむしろ重要であり、尊いんだ、という判断があります。ですから、池田SGI会長がハーバード大学で講演された時（1993・9・24）も、「平和創出の源泉」「人間復興の基軸」「万物共生の大地」という三本柱で、「二十一世紀の文明と大乘仏教」（1993年）と講演されましたけれども、その「人間復興の基軸」に関して、「基軸になるものは一体何か」ということでは、先生は具体的な宗教を挙げられませんでした。“大聖人の仏法”などとは言っていないのです。ジョン・デューイのコンセプトを援用しつつ「ザ・レリジヤス」「宗教的なもの」というある意味では非常に抽象的な概念をキーワードとして挙げておられます。具体的に、「何々宗」と形をとったものではないですから、目に見えないものですね。「ザ・レリジヤス」「宗教的なもの」が教義的な“宗教”から抽出され、それが人間の人格に反映されてこそ初めて、“人間復興の基軸”たることが出来るのだ、と講演をされました。「究極の精神的實在」への肉迫ということでは、全部同じ次元を志同していることが分かります。

「深い哲理」を持つことの大切さに関連して、トインビー博士の「究極の精神的實在」ということを申し上げてきました。これは固い言葉で申しますと、認識論的、あるいは存在論的な対象として捉えられているのではなくて、本当に人間の生き方、すなわち倫理的規範として捉えられている。その側面を忘れてはならないと思います。存在論、認識論に対していえば、価値論として捉えられている。

トインビー博士のモットーは「さあ、働こう」と言われています。また、「自己超克こそ宗教の真髓である」、これも博士のモットーです。この「宗教の真髓」というのは「自己超克」ですから、小我から大我へ、小さい自分から大きな自分へという形で、どんどん自分を超克していく、その源泉になるのが真実の宗教である、ということですね。この「自己超克」こそ「宗教の真髓」である、ということは、「究極の精神的實在」への肉迫と同義語として言われているわけです。

人間を良くするのか、悪くするのか

池田先生が、イタリアのボローニャ大学でのレオナルド・ダ・ヴィンチに関する講演（1994年6月1日。「レオナルドの眼と人類の議会—国連の未来についての考察」）で「月月・日日につよ（強）り給へ・すこしもたゆ（撓）む心あらば魔たよりをうべし」（御書1190頁。「聖人御難事」）との御文に言及されました。月々日々に強る心とは何か、それは月々日々の間断なき飛翔であり、間断なき前進なんだと。仏法の信仰の真髓と言うのは、間断なき「自己超克」です。トインビー博士の言葉で言えば、これこそが本当に「究極の精神的實在」への肉迫なのである、ということですね。

従って、ハーバード大学の講演でも「人間復興の基軸」というところをどう説き起こしたかという点、宗教を考える場合は縦軸だけでなく、横軸でも考えなければならないという点でした。縦軸というのは何か。仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教といった分け方です。仏教の中でも日蓮宗、浄土真宗等、色々な分け方がありますけれども、こうした分け方が縦軸だとすると、横軸も必要であるということです。横軸とは何か、と言いますと、その宗教が人間を強くするのか、弱くするのか、良くするのか、悪くするのか、賢くするのか、愚かにするのか、この視点なんです。こういう横軸を交差させて考えなければならない。どんな宗教であろうとも、人間を強くし、良くし、賢くするという働き（これが「宗教的なもの」の内実です）をしなければ、二十一世紀を開く宗教の名に値しない、とハーバード大学での講演を展開されたのです。

倫理的規範、これが大事です。要するに、全部人間が良くなり、強くなり、賢くなるための宗教でなければならない。縦軸だけで考えると、例えば、日顕宗も宗教のうちです。しかし、その大御本尊在しますところが、“色”と“金”まみれなんですから、これは座標軸の中では横軸を交差させて考えないとどうしようもない。捉えられないです。これが非常に大事な座標軸であるということです。

従って、今回（2002年）の「1. 26の提言」の中では、先生は、カール・ユングの言葉を引かれて仰っています。ユングが「人間不在」という現代の悪霊について、「ゼロを一万回足したところで一にすらなりはしない。すべてはひとえに一人一人の人間の出来いかにかかっている。それなのにこの現代という時代は浅はかにも、数の大きさや組織の大きさでものを考えることしか知らない」（『現在と未来』。平凡社刊）と。物事の成否は、いつに“人間の出来いかに”だと。その人間の出来が、良く、強く、賢くなっているのか、あるいは逆なのか。それが一番のポイントである、ということです。ゼロを一万回足したってゼロにしかならない。同じように、いくら法をいじり、制度をいじってみたところで、人間の出来が良くなければ、社会は根本的には改善されないわけです。

かつて「アフーマティブ・アクション」というアメリカの人種差別反対運動の中で勝ちとられたシステムがありました。それまでの人種差別というものを是正するために、例えば、就職する場合、入学する場合、白人以外は“下駄”を履かせるというか、優先的に入学させるというようなシステムが出来たんです。こうした公民権運動の輝かしい結果はどうだったか。その後、人種差別感情に起因する「ヘイト・クライム」、憎悪による犯罪がむしろ増加しているのです。もちろん法律での規制や手当てが必要です。そのためにローザ・パークスさんやマルチン・ルーサー・キング牧師が一生懸命やったのです。ただ、それだけではいけない。ユングのいうように、法的、制度的改革がかえって裏目に出てしまい、それをきっかけに、（人間の出来、という点が忘れられてしまうと、）かえって人種間の憎悪による犯罪が増えてきている。「ゼロをいくら足してもゼロにしかならない」というカール・ユングの警告が重みを増すゆえんです。

ですから、先生が『青年の譜』で仰っているように、「二十一世紀に生きゆく／民衆の願望は／外形のみの改革にはない／一人ひとりの哲学と思想の中に／平和裡に漸進的な／汝自身の／健全なる革命を願っている」、このことが大事です。こうした人間の内面的価値、内面的規範の重視ということが、トインビー博士ともカール・ユングとも波長が合う理由でしょう。

対談の「序文」の中でも、そのことをトインビー博士は、はっきり書かれています。「また二人の共著者の見解では、人間にとっての永久の精神的課題は、己の自我を拡大し、その自己中心性（エゴティズム）を“究極の实在”と同じ広がりのもにすることである」。すなわち小我を大我に、ということです。「しかして、それは厳しい精神的努力によって現実生活に生かされる必要が、どうしてもあるのである」。まさに間断なき飛翔、間断なき前進が欠かせないので。「こうした個々の人間による精神的努力こそ、社会を向上させる唯一の効果的手段である」、これです。全て人間の“出来いかに”なんです。「人間同士の関係は人間社会を構成する網状組織（ネットワーク）であるが、諸制度の改革というものは、それらがいま述べた個々の人間による精神変革の兆候として、かつその結果として現れてきたとき、初めて有効たりうるのである」。これは「究極の精神的实在」が、一つの倫理規範として提起されている点で大きな意味を持っていると思います。

その他、対談集から取り上げるべきテーマは色々あります。中国や東アジアに対する注目なども重要ですが、先生が、中国を訪問した折にも、様々な形で語っていることですので、皆さ

んもよくご存知の通りであると思います。

世界宗教から世界文明が誕生

最後に、この池田・トインビー対談の波及効果と言いますか、色々な影響を与えています。当時、相模工大教授だった、謝世輝という歴史学者がおられます。その方が1972年の暮れに発刊された『歴史の研究』の改訂版において、トインビーの歴史観に微妙な変化が生じている、という寄稿文を聖教新聞（1974年3月13日）に寄せてくれたことがあります。その点を若干お話しして終わりにしたいと思います。

対談集の「序文」だけ読んで分かりますけど、世界が統合化されていくグローバリズムの流れに対して、トインビー博士の見方は、池田先生に比べてずっと悲観的です。この「序文」というのは、アーノルド・トインビーと池田大作という連名になってはいますが、主文は博士が書かれたものです。その中で博士は、世界の統合は、そう簡単にはいかない。大きな代償を払わなければならない。恐らく、多くの血が流されるだろうぐらいのことを想定されているんです。従って、博士ご自身は「池田大作よりも悲観的だ」と言っています。何故かなら、歴史から見ると、統合化というのは、ほとんどが部分的統合であっても巧くいくことがない。必ず武力、力による統合が一回なされなければだめなんだ、という考えを持っている。すなわち博士の把握では「権威ある文明が崩壊すると、その後に乱世が来る。その乱世が、部分的であっても世界帝国によって統一される。しかし、それも一時的しか続かない。でも、続かないけど、それは崩壊することによって世界宗教というものが出来る。その世界宗教をベースにして世界文明が生まれる」という流れを中国やローマ帝国の例を引きながら、著作『歴史の研究』の中で述べてきたのです。

ところが、1972年末と言いますから、すなわち博士と池田先生との対談が行われた半年後に出版された、『歴史の研究』改訂版では、博士の見方が変わってきている、と謝教授は指摘し、以下のように書きました。『今後は情勢が複雑であるため、以前みたいな図式は適用しないであろう』。そして『乱世時代→世界宗教→世界共同体という順序になるであろう』とトインビーは断定までいかないが、示唆しているのである」と、トインビー博士の歴史観に微妙な変化が起きてきているということを寄稿の中で指摘してくれました。そして、その文章の結論部分でこう述べています。「すなわち、世界宗教はさしせまった課題として、いよいよもって重要になってきたのである。『世界共同体の創設はさけられない時代の要請である』ということは、多数の先見の明ある人々が一致して認めることであるが、たんなる政治・経済・社会機構の設定（制度の設定）のみではものごとは解決できない。精神が腐敗していれば、制度上の改革は実りあるものとはならないのである。精神の変革こそ先んじなければならない（人間革命こそ真先に必要である）。トインビーは今年4月14日で満85歳の誕生日を迎える。最近トインビー博士はますます宗教への帰依を強めているといわれる。

すなわち宗教が万物の根源であると考えるのである。これはたんに老人の心境に帰せられるものではなく、博識の人格者としてその洞察からくるものであろう。これが謝世輝さんの文章の末尾の言葉です。トインビー博士の史観の変化は、必ずしも先生との対談によってこうなった、と言うわけではないでしょうけれども、陰に陽に宗教パワーに対する一つの期待というのが、池田先生という巨大な人格を通してトインビー博士に反映されているということは、決して間違いではないと思っています。

時間の関係で大分、端折りましたが、そういった点を留意されながら、グレート・ダイア

ログの“源流”ですから、ぜひ、もう一度、対談集を読み返していただきたい、と申し上げて終わらせていただきます。ありがとうございました。